

令和元年6月4日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K06650

研究課題名(和文) 行政区画不問で共有された生活像を起点とするフランスの広域プロジェクト都市計画

研究課題名(英文) Wide-area and project-oriented city planning based on the QOL vision beyond administrative limite in France

研究代表者

鳥海 基樹 (TORIUMI, Motoki)

首都大学東京・都市環境科学研究科・准教授

研究者番号：20343395

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：最大の実績は、2018年6月に上梓した『ワインスケープ』である。今後の農村観光やフード・ツーリズムの発展を見込むに、それら遺産を守り活かすべく、食文化研究への文化遺産論や都市計画学の参入は不可欠である。本書は、その基礎理論を構築した。同時に、無形と有形の遺産を統合する視点を提示した。食には味わいや所作という無形遺産と共に消費の場があり、さらには食材の生産空間や流通基盤がある。それらを縦断する視点の提起や、その活用による地域振興の議論は、上書の大きな貢献と史料する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、我国の文化財保存論に欠落している酒造遺産という新たな学問分野を開拓し、かくなる遺産を6次産業的に捉えるアイデアや、それを扱う都市計画にスマート・スプロールという現実的概念を提供する。また、ワインスケープという新たな概念、さらにはその保存理念の抽出は、他の食文化の遺産保護や景観創造に関する建築学・都市計画学の基礎的フィロソフィを形成し、今後の学術的発展の基台を形成する。また、行政学や文化経済学への学際的波及効果もあろう。さらに、オギュスタン・ベルク氏やジャン＝ロベール・ピット氏との意見交換は、本研究の国際的な拡がりという意義を有する。

研究成果の概要(英文)：The biggest achievement is "Winescape", published in June 2018. In anticipation of the development of rural tourism and food tourism, it is indispensable to globe cultural heritage theory and urban planning into food culture research in order to protect the heritage. This book has built its basic theory. At the same time, he presented a perspective to integrate intangible and tangible heritage. There are places of consumption as well as intangible heritage such as taste and behavior in food, and there are also food production and distribution bases. This viewpoint which traverses them and the discussion of regional promotion by its utilization are a big contribution of my research.

研究分野：都市計画

キーワード：ワインスケープ スマート・スプロール 地方集権 中央分権 グラン・パリ 首都圏整備計画 マルセイユ ユーロメディテラネ公

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

#### 1. 研究開始当初の背景

我国の広域行政論が二重行政解消や支出削減という「まずコストありき」で発想されるのに対し、それは問いの立て方の転倒で、「まず生活像の共有ありき」で考え、その実現に必要なガバナンスを後置的に逆提案するのが正当な手順とするものと言える。

#### 2. 研究の目的

本研究は上記問題意識に対し、フランスのプロジェクト都市計画を対置する。これは、行政区画不問で「まず生活像の共有ありき」で考え、その実現に必要なガバナンスを後置的に考察するのが正当とする考え方である。今次研究の視座として「生活像の共有に立脚した大都市のグランド・デザイン」「コンパクト・シティ性善説からの脱却とスマート・スプロールの計画技術」「景観街づくりを起点とした広域都市計画の可能性の探究」を設定する。それらを欠点も含めて分析し、立地適正化という単眼的論点の下、単一自治体により規制(緩和)中心で構築される我国の街づくりに対し、生活像を基軸に開発や郊外化に偏見を持たない複眼的な計画技術、そして可塑的な広域行政区画の逆提案手法の確立を目的とする。

#### 3. 研究の方法

研究方法論的には新機軸はない。文献・資料収集、担当者への聞き取り調査、そして現地踏破を3本柱とし、理論と実態両面からの着実な把握という古典的・実証的研究姿勢を取るしかないと思える。また、研究成果発表に関しては、これまで同様、後に資料的価値を有する学術的研究や出版、我国の都市政策形成への知見提供、そして一般メディアでの情報発信の3本柱で適宜に実施する。

#### 4. 研究成果

##### (1)2016年度:

3点の出版により成果を公表した。内容は、フランスの首都圏整備計画、マルセイユの都市再生、フランスに於ける郊外脱出研究の翻訳である。フランスの首都圏整備計画研究は、2016年1月に首都圏共同体が設置された時点までを法学研究者の論考集の中でまとめた。そのため、ガバナンスを中心とした記述となっている。これは、現時点では結局のところ、具体的プロジェクトとして動いているのが地下鉄建設のみであることから正当化されよう。さらに、フランスでは2017年5月に大統領選、同6月に下院選挙があり、パリ市の革新系市政と中央のねじれが予想されるので、この時点までをまとめれば現時点では十全と考えた。

マルセイユの都市再生は、都市計画研究者の論考集でまとめたもので、プロジェクトを中心とした記述である一方、大統領や市長の牽引力を記述し、政治主導のあり方に関して考察した。さらに、それがガバナンスに及ぼす影響に関して考察した。他方で、港湾機能の強化そのものに関しては研究が及ばなかったため、今後の課題としたい。また、別の課題とはなるが、イタリアのジェノヴァの港湾再生が先行する動きを見せており、それもまた追跡する必要がある。フランスの郊外脱出研究は、フランスそのものというよりも、日本や中国も含めた世界史的研究である。問いとしては、それらが現代に於いて到達した外部性を負担しない異常な郊外生活のあり方だが、他方で、では現代のコンパクト・シティ構想が絶対善かという疑問を持った。そのため、訳者解題としてスマート・スプロール論を試みた

##### (2)2017年度:

前半はフランス国立社会科学高等研究院(EHESS)に客員研究員として在籍しつつ、主にワインスケープに関する資料収集、聞き取り調査及び現地調査、さらには研究の基礎固めを進め、後半はそれらの成果をまとめることを主眼とした。それらをまとめると以下の3点に整理できる:

1. 企業の広報誌のワインスケープ特集を監修することを通じ、現在の研究に欠落している部分を再認識し、それを補完する資料などを再確認したこと。とりわけジャン＝ロベール・ピットの著作の批判的読解の必要性や、味覚の名勝地制度の調査の必要性を看取した;
2. ワインスケープそのものではなく、その保全を担う都市計画制度の分析を通じ、コンパクト・シティやスマート・シュリンキングとは異なる、スマート・スプロールの概念とその制度設計を考察したこと。さらに、それらにサーヴィスする商店などをまとめたコンパクト・マーケットの考え方と、その副作用としての屋外広告物の氾濫や景観の紊乱を抑止する制度をフォローした;
3. それらをまとめる形でシャンパーニュに関する各論を出版し、さらにフランスのワインスケープ全般に関する書籍の原稿を準備した。

また、併行して、マルセイユに関し、地方分権の誤謬を認識した国家主導の都市開発、文化政策による都市再生とガバナンスの拡張、さらにアジア・モンズーン型、北欧型、砂漠型のいずれとも異なる地中海型の建築・都市の環境学の基礎的研究を進めた。

##### (3)2018年度:

最大の実績は2018年6月に上梓した単著『ワインスケープ』である。以下に建築・都市計画に関する結論の概要と、看取された課題を記す。

まず、アグリツーリズムの進展は、前衛的で洗練された農業建築、即ちアグリテクチャーの出現を促す。問題は、前衛的意匠が周囲景観を紊乱しない制度設計である。また、銘醸地で必要なのは、地域の生活環境制御もさることながら、イメージの経済学に基づく都市計画である。その究極の様相が、生産者組織が生産物のイメージ・ダウンを理由に都市計画の見直しを要求できることである。そして、銘醸地へのコンパクト・シティ論やスマート・シュリンキング論の適用は愚策で、スマート・スプロールのような離散的都市計画が必要になる。ただ、自動車利用を前提とした商業施設は派手な屋外広告物を出すため、その規制が交換条件となっていた。

他方、フランスのワンスケープが抱える課題に関しては、cultureの語源論を援用して植民地化の懸念という概念に総括した。無理な農地拡張や安易な耕作放棄はグローバル化による農地の植民地化と言える。呼称保護や収益増加という登録推進理由には、経済による世界遺産システムの植民地化が透けて見える。イコモスの調査委員の見解の絶対性も、イコモスによる世界遺産の植民地化と強弁できようし、世界遺産委員会での非科学的な外交取引も同委員会の植民地化と形容できる。観光に関しても、一部ではホスピタリティが商品化され、酒蔵が経済に倒錯的に植民地化されている。

植民地化の対極は主権の確立で、本論の文脈では食料主権という考え方である。文化的景観という表現を前に、cultureの真意がcolonyではなく文化、宗教、そして農耕にあることを再認識することが、植民地化を忌避し、食料主権の尊重や回復に帰結するはずである。ワンスケープはその契機として存在することを、本書は結論とした。

また、併行して進めたマルセイユ研究の概要は以下の通りである：

まず、小職は上述の通り、既に2016年度にユーロメディテラネ構想（直訳では欧州・地中海構想だが、意識すれば欧州地中海覇権都市建設構想）に関する研究を発表した。しかし、市長のインタビュー記事に影響され、そのリーダーシップを誇張してしまった嫌いがある。事実、その後の調査に拠れば、むしろ国が黒子に徹しつつ右往左往する市を方向付けしたようである。つまり、地方分権されても優柔不断であったり、アイデアを出しそれを施行できない自治体があるのであれば、むしろ国家主導の地方再生があっても良いのではないかというのが本研究の問題意識である。

そこで、およそあらゆる分野での地方分権性善説の風潮にあって、むしろ中央主導の港湾再生の可能性を分析している。他方、2016年度の研究を受け継ぎ、衰退港湾の再生を「文化」化とのコンセプトで考察した。2013年の欧州文化首都に共振させて港湾都市から文化都市への転換を図ったマルセイユは、文化化されたイメージを活用し、ハイ・カルチャーに高い関心を示す富裕層が乗るクルーズ船の誘引に乗り出している。さらにそれが都市全体の再生につながることを明らかにするべく研究中である。

今後の課題として、対象はあくまでマルセイユだが、文化化の過程で影響を受けたとされるライバル港湾や、従来の工業・通商機能の移転先との棲み分け調査も行う。同時に、マルセイユの戦後政治史を整理したい。港湾労働者の都市として1995年まで社会党市政が続いており、その末期に文化化の基礎が築かれた一方、国主導の体制がそれ以降の保守系市政で本格化したとの仮設の下、国と地方、あるいは財界等の利害関係を明らかにしておく。

## 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

鳥海基樹(監修):「ワインが守るフランスの農村風景」『approach』(竹中工務店機関誌) 2017年春号、pp.2-19(ピット、ジャン＝ロベール:「ガストロノミーと景観」、pp.4-6の翻訳を含む)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計5件)

鳥海基樹:『ワンスケープ—味覚を超える価値の創造』、東京:水曜社、2018年6月、400p

鳥海基樹:「シャンパン生産地の文化的景観の保全」、糊沢能生(他編著):『現代都市法の課題と展望』、東京:日本評論社、2018年1月、pp.503-520

鳥海基樹:「マルセイユ—斜陽都市を欧州文化首都に押し上げる大統領と市長の牽引力」、西村幸夫(編著):『都市経営時代のアーバンデザイン』、京都:学芸出版社、2017年3月、pp.171-187

鳥海基樹:『フランスに於けるスマート・スプロールの計画技術に関する基礎的研究—持続可能な郊外開発を探求するために』、第一生命財団研究報告書、2017年7月、157p

オギュスタン・ベルク(鳥海基樹訳):『理想の住まい—隠遁から殺風景へ』、京都:京都大学学術出版会、2017年1月、pp.1-482(さらに、鳥海基樹:「訳者解題:都市計画はコスモスの咲く風土を回復できるか—ベルク理論から賢明な郊外拡散(スマート・スプロール)へ」、pp.431-446)

鳥海基樹:「フランスの首都圏整備計画に関する考察」、吉田克己・角松生史(編著):『都

市空間のガバナンスと法』、東京：信山社、2016年10月、pp.343-375

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

## 6．研究組織

(1)研究分担者：なし

(2)研究協力者：なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。